

# 未完の大国ブラジル

## —BRICs ではなくれないブラジルの歴史と可能性

国立大学法人 長崎大学 名誉教授  
経営アドバイザー

藤野哲也

### いま、なぜブラジルなのか

少なくともこれからの10年間、BRICsを中心とする新興国経済・市場が世界経済の重要な位置を占めることは明らかであるが、アジアにおいてそれは中国およびASEAN諸国であり、またそれらの国々はブラジルと経済的に深く結びついている。例えば、ブラジルの貿易では2011年には対中国貿易が輸出・輸入ともに対米国貿易取引高を超え、中国側からしても「今やブラジル産の大豆なしには毎日の暮らしが成り立たない」という関係が成立しているのである。

多くの日本企業がタイ、マレーシア、ベトナム、インドネシアなどの中間所得層をターゲットとする事業戦略を中期経営計画に掲げているが、ブラジル1国の経済規模は「ASEAN 10カ国」の合計より大きく、その技術レベルはASEANよりもはるかに進んでいる。例えば、JALが使用する小型旅客機はブラジル・エンブラエル社製であり、国営石油会社ペトロブラスの海底油田掘削技術は世界のトップレベルにあるとされる。また、2012年からブラジルで仮想商店街事業を始めた楽天・三木谷社長によれば、ブラジルは今後5～10年で電子商取引の大国になる見通しである。

また、鉱物資源については「ないものは何ひとつない」と言われるほど豊富で、唯一欠けていた天然資源である石油も、80年代のリオデジャネイロ沖海底油田の発見と掘削技術の開発により、現在では自給が可能となっている。

農業生産も盛んで、三井物産によるブラジル最大手の農業事業法人との合弁企業設立は中国やアジア市場を狙ったものと言われており、双日など日本商社もブラジルでの農業ビジネスに注力している。ブラジルは、大豆（生産量世界2位、輸出货量世界1位）、牛肉（生産量世界2位、輸出货量世界2位）、オレンジジュース（生産量世界1位、輸出货量世界1位）など、農産物輸出の大国でもある。

同国は14年のFIFAワールドカップ開催国であり、16年のオリンピックがリオデジャネイロで開催されることも衆知の通りである。しかし、13年6月上旬からブラジル各地でバスと地下鉄の運賃引き上げをきっかけとしたデモが発生し、6月19日にはサンパウロとリオデジャネイロ市長が運賃値上げを撤回したものの、デモには一部で暴徒が加わり、ルセフ大統領は今年6月26日からの来日を延期しデモの鎮静化を図っている。

今、ブラジル経済をどう捉えるべきなのか。「ブラジル＝ハイパーインフレーションと外債危機問題の国」という過去の記憶を引きずり、欧米企業の対伯投資に後れを取った日本企業は今後どうすべきなのかについて、以下で考えてみたい。

### ブラジルは BRICs にあらず

01年にゴールドマン・サックス証券のエコノミストであるジム・オニールがBrazil, Russia, India, Chinaの頭文字を採ってBRICsという造語を提唱し、それを“emerging markets”（新興国市場）としたが、その時にオニール自身は「人口が膨大